

幕末役者見立絵の見立て

『見立三十六歌撰』について

山下則子

私が論じる「見立て」とは、連想するということです。何か一つ共通する点があって、全く違うものを連想するということです。例えば礪田湖龍齋画『見立草木八景』の中の一つ「白牡丹暮雪」は、白牡丹の白から雪を連想し、そこから「近江八景」の中の「比良暮雪」を連想したということです。本論で扱う揃物役者見立絵『見立三十六歌撰』は、三代目歌川豊国画で、嘉永5年（1852）9月、10月、11月改印つまり1852年9月10月11月に何枚かずつ出版許可を得て、江戸の伊勢屋兼吉から版行されたものです。これから紹介する『見立三十六歌撰』は、全て町田市国際版画美術館のもので、36枚全てが揃っていて、大変状態も良いものです。

例えば次の絵【図1】は、凡河内躬恒おうちこうちのみつねの和歌「いづくとも春の光はわかなくにまだみよしの山は雪降る」を浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』に登場する、菅原道真の家来である舍人桜丸とねりに見立てたものです。和歌の意味は、「世の中全てに春の光は分け隔てなく満ちているのに、まだ吉野山には雪が残っている」ということで、この絵の背景には桜が咲いています。和歌の「春・吉野」という言葉から、桜で有名な吉野山を連想し、『菅原伝授手習鑑』二幕目加茂堤の場に登場する桜丸へと見立てたものです。桜丸の赤縮緬の衣裳には、桜の紋があり縮緬に桜模様の織りが全面に入っています。これは浮世絵の正面摺りという手法で、絹の着物の繊細な織りを表現しています。つまりこの絵は桜が強調されているのです。更にこの和歌の言葉の奥にある真意は、「他の方々へは延喜帝の御恵みが行き渡っているが、私のみは不遇である」つまり官位昇進していないことへの不満を述べたものです。

和歌が見立てられた桜丸は、単に「春・吉野」から「桜」を見立てたのみではなく、『菅原伝授手習鑑』に登場する3つ子の舍人松王丸、梅王丸、桜丸の中で、桜丸は菅丞相に仕えて菅丞相の娘菟屋姫とぎよと斎世親王との恋の取り



【図1】町田市国際版画美術館蔵『見立三十六歌撰之内凡河内躬恒』。

持ちをしたことを悪人に利用されて、菅丞相を陥れられる原因を作った罪を悔いて、唯一自害する役であることを踏まえています。そして、桜丸に見立てられている歌舞伎役者は、似顔から初代坂東しうかと思われます。しうかが桜丸を演じたのは、『歌舞伎年表』（伊原敏郎・岩波書店・1961年刊）には記載されていませんが、『朱筆書入れ江戸芝居絵本番付集』（鳥越文蔵他・早稲田大学出版部・1992年刊）所収の絵本番付より、嘉永3年（1850）7月中村座上演の『菅原伝授手習鑑』である

ことがわかります。その時は中村座、市村座ともに『菅原伝授手習鑑』を競演し、絵本番付の書き入れによると、しうかが出た中村座は不評だったようです。その時の梅王丸は中村座は7代目市川高麗蔵、市村座は初代大谷友松ですが、『見立三十六歌撰』では既に14年前に亡くなっている、3代目中村歌右衛門の梅王丸で描かれます。同じようにその時の松王丸は中村座は8代目市川団十郎、市村座は3代目嵐吉三郎ですが、『見立三十六歌撰』では56年前に死んだ2代目中村仲蔵の松王丸が描かれています。

『見立三十六歌撰』の見立ては、幕末役者見立絵の中では比較的難いと言えます。嘉永5年（1852）閏2月から6月頃に、つまり『見立三十六歌撰』の半年ほど前に『役者見立東海道五十三駅^{とうかいどうごじゅうさんつぎ}』の最初の55枚が出されますが、53駅の土地にちなんだ人物が描かれているので、その見立てを解くのはこれほど難しくはないのです。しかし『見立三十六歌撰』の魅力は、見立てを解く難

しさにあるとも言えます。なぜなら苦労して和歌の見立てを解いた時の喜びや思いがけない見立ての手法に、思わず微笑むことも多いからです。

見立てを解く順序としては、和歌の意味を理解した上で、描かれている人物がなんという作品に登場する人物かを判断します。つまり和歌が見立てられている人物には、名前が書かれていますが、その名前や衣裳などから、江戸時代の歌舞伎・浄瑠璃や読本・合巻などの文学の中に登場する多くの人物から、出典となる作品を特定します。しかもその人物は江戸時代の歌舞伎役者の似顔で描かれていて、歌舞伎役者の名前は書かれていません。似顔からそれが誰であるかを推測するのです。似顔は様々な役者絵を見ることが大事ですが、『古今俳優似顔大全』(早稲田大学演劇博物館役者絵研究会編による影印本あり。八木書店・1998年刊)という便利な本もあります。その歌舞伎役者は、浮世絵が作成された1852年に活躍中の役者である場合と、既に死んでしまっている役者の場合があります。図中の人物名からどういう「世界」(例えば源平の世界とか)の登場人物であるかを判断し、作品名を検討します。それには『世界綱目』(国立劇場芸能調査室編『狂言作者資料集(1)』1970年刊)、『歌舞伎細見』(飯塚友一郎・第一書房・1933年刊)などの本を使用します。推測した作品の上演を調査して、似顔で描かれている役者が演じたかどうかを確認します。実際には歌舞伎上演されていなかったり、上演されていても歌舞伎では違う役者が演じていたりする場合があります。

こうした役者見立絵で描かれている役は、その歌舞伎役者の当たり役である場合が多いのではないかと、普通は予想すると思います。もちろん当たり役である場合もあります。例えば次の絵は【図2】、紀貫之の和歌「桜散る木の下の風は寒からで 空に知られぬ雪そふりける」を、歌舞伎舞踊劇『積恋雪関扉』(通称「関の扉」)に登場する、関守関兵衛実は大伴黒主に見立てたものです。和歌の意味は、「咲き乱れた桜が散っている木の下に立っても、誠に雪が降っているようではあるが寒くはない。空に知られぬ雪なので、吹く風が寒くないのは当然である。雪ではなくて花の雪なのだから」という意味です。この絵は、『積恋雪関扉』の関兵衛が天下調伏祈願の護摩木にしようと、雪の中に花咲く墨染桜を切ろうと斧を持って近寄るところです。すると墨染桜の精が傾城墨染と名乗って現れます。雪の中で満開の花を咲かせる墨染桜の下で、関兵衛実は大伴黒主と墨染桜の精が立ち回りとなります。つまり雪ならぬ桜吹雪の中での立ち回りです。和歌の「桜散る・雪」を『積恋雪関扉』に見立てたものです。天



【図2】町田市国際版画美術館蔵
『見立三十六歌撰之内紀貫之』

明4年(1784)11月江戸、桐座上演『^{じゅうにひとえこまちざくら}重々人重小町桜』の大切浄瑠璃『積恋雪関扉』は、初代中村仲蔵の関兵衛、3代目瀬川菊之丞の墨染桜の精で演じられ、現在でもしばしば上演される舞踊劇です。菊之丞の墨染桜の霊の図も、『見立三十六歌撰』に描かれています。舞踊が得意であった初代仲蔵の代表作の一つであり、文久2~3年(1862~63)刊『古今俳優似顔大全』にも初代仲蔵は関兵衛の扮装で描かれています。このようにその役者を代表するような、評判であった役や何度も演じた役のような当たり役が描

かれているのは、36作品中8作品、つまり22%です。そして初代仲蔵は、寛政2年(1790)つまり『見立三十六歌撰』刊行の60年以上前に死んでいます。3代目菊之丞も文化7年(1810)つまり40年以上前に死んだ役者です。このように見立てられた歌舞伎役者は、『見立三十六歌撰』が作成された1852年に、既に死んでしまっている役者の場合が約50%でした。

また、『見立三十六歌撰』に描かれている役者とは、実際の歌舞伎とは違う役者がその役を演じている場合が約30%もあります。例えば次の絵【図3】は、伊勢の和歌「三輪の山いかに待みん 年ふとも尋る人もあらじと思へば」を、浄瑠璃『^{いちのたにふたぼんき}一谷嫩軍記』に登場する熊谷次郎の妻相模に見立てています。和歌の意味は、「私は父のいる大和へ下りますが、大和の三輪山の神はどんなにか待つことでしょうか、どれほど待つとも訪ねる人はあるまい(あなたのお越しはあるまい)のに」というものです。愛する男に捨てられた悲しみの歌です。見立てられた相模の登場する『一谷嫩軍記』は、『平家物語』に語られる源氏方の武将熊谷次郎直実が、若くて美しい平家の公達平敦盛の首を取る時のため

らいと苦しみから造型された浄瑠璃です。熊谷が討った首は、敦盛と見せて実は我が子小次郎であったという内容になっています。源義経は平敦盛が実は天皇の落胤であることを知っていて助けるつもりであり、子供の時に平家方の武士平宗清に命を助けられたその恩義に報いようとして、暗に熊谷に敦盛を助けるように命じたというのです。しかし小次郎に会いたくて、わざわざ熊谷のいる陣屋まで訪ねてきた妻の相模は、身替わりの首であることを知りません。平敦盛の首と思っただけのもが我が子の首である



【図3】 町田市国際版画美術館蔵
『見立三十六歌撰之内伊勢』

ことを知った相模は、義経の面前であるので取り乱すこともできず、声をつまらせず。その悲しみと驚きの表情がよく描かれています。和歌の「いかに待みん 年ふとも尋る人もあらじと思へば」を、どんなに待ってももう小次郎は戻ってこないという意味に捉え、相模に見立てたものと思われる。そして、相模に見立てられている歌舞伎役者は、4代目尾上梅幸です。4代目梅幸は後の4代目尾上菊五郎のことで、3代目菊五郎の婿です。技量があり品位があって時代物に適していた人ですから、相模はまさにぴったりの役柄と思われるのですが、なぜか一度も演じた記録がありません。この絵は1852年10月の改印ですが、直前の9月に上演された『一谷嫩軍記』の相模は、3代目嵐璃寛ですし、嘉永3年(1850)3月に上演された『一谷嫩軍記』の相模は、2代目尾上菊次郎でした。さかのぼって天保12年(1841)4月の相模は杜若こと5代目岩井半四郎です。これらの歌舞伎で演じた役者よりも、4代目尾上梅幸は相模に適



【図4】町田市国際版画美術館蔵
『見立三十六歌撰之内斎宮女御』

していたと思われます。この絵を考案した人も、同じように考えたのではないのでしょうか?つまり『見立三十六歌撰』は実際の上演とは別に、最もその役に相応しいと思われる役者が見立てられている場合があるのです。

『見立三十六歌撰』の見立ての中には、歌舞伎役者の特徴や噂話なども利用していることがあります。例えばこの絵【図4】は、斎宮女御の和歌「琴の音に峰の松風かよふらし いつれのをより調べそめけむ」を浄瑠璃きいちほうげんさんりやくのみき『鬼一法眼三略卷』に登場するみなつる皆鶴姫に見立てた

ものです。和歌の意味は、静かな初冬の夜、美しい琴の音に峰の松風の音が通い合い、妙なる調べが響いてくる。いったい琴・峰のどちらの「を」（琴の緒つまり弦、峰の尾つまり小高い尾根）から奏で始めたのであろうか、という意味です。見立てられた皆鶴姫は、自分に横恋慕する男に武術試合で勝ってその野心をくじき、平清盛に対して重盛からの諫言状を読み上げるほどの大胆な女性で、奴虎蔵実とらぞうは牛若丸を恋い慕い、熱烈にくどきます。和歌の「琴の音に峰の松風かよふらし」を虎蔵に慕いよる皆鶴姫に見立てたものと思われます。そして皆鶴姫に見立てられている歌舞伎役者は初代市川新車と思われます。嘉永3年（1850）9月に『新十八番の内虎の巻』という外題で『鬼一法眼三略卷』が上演された時は、皆鶴姫は2代目尾上菊次郎でした。鬼一法眼は5代目市川海老蔵で、『見立三十六歌撰』にも描かれているほどです。ところで

この時の歌舞伎は二番目
 大切では、『朱筆書入れ
 江戸芝居絵本番付集』
 所収の絵本番付によると、
 祖父の2代目市川門之
 助、父の初代市川男女
 蔵、兄3代目市川門之
 助の三人の追善興行とさ
 れています。この時の4
 代目市川門之助は4代目
 常磐津文字太夫も襲名
 しており、音曲方面での
 活躍が目立つ人で、こ
 の時も常磐津文字太夫
 として追善に参加しま
 した。演目は絵本番付
 によると『追善兜軍記』
 で、『壇浦兜軍記』の
 中心である阿古屋を、
 女形であった3代目
 門之助が得意としたた



【図5】 町田市国際版画美術館蔵
 『見立三十六歌撰之内柿本人丸』

め追善興行に選ばれたと思います。ところがこの琴・三味線・胡弓を弾く女形最高の役を5代目市川海老蔵は自分の子供である猿蔵、この時若干17歳ですが、猿蔵に勤めさせてしまいました。門之助の相続人である女形の新車は中村座に出ていたのですが、自分に相談もなく子供のような猿蔵に阿古屋を勤めさせたことで大いに怒り、中村座を休んでしまった、と絵本番付書き入れに書いてあります。つまり、この騒動は大いに江戸歌舞伎愛好家達の同情を誘い、『見立三十六歌撰』では新車は皆鶴姫を演じてはいませんが、新車の似顔で描いたのだと思います。阿古屋で描いてはあまりにも批判が直接的ですし、「琴の音に～」の和歌や海老蔵の鬼一法眼を見れば、新車が皆鶴姫を描いた意図は歌舞伎愛好家であれば解るはずです。

私は「Publishing the Stage」という集会で、舞台がそのまま浮世絵になっていない例ばかり挙げているようで大変恐縮ですが、最後に歌舞伎化もされてい

ない作品について考えてみます。次の絵は【図5】、柿本人丸（江戸時代は人麿ではなく人丸と言われています）の歌とされている和歌「ほのほのと明石の浦の朝霧に 嶋かくれゆく舟をしそ思ふ」を松浦佐用姫に見立てています。和歌の意味は、ほんのりと明るんでいく明石の浦、その明石の浦に立ちこめる朝霧の中を、嶋隠れに行く舟をしみじみと感慨深く思っていることよ、という意味です。松浦佐用姫とは、恋人が異国へ出征するのを悲しみ、山に登って恋人に領布（ひれ）を振った伝説上の女性のことで、和歌の中の舟を、松浦佐用姫の恋人が乗る舟として、見立てたものです。松浦佐用姫伝説の文学への登場は、『万葉集』巻五の山上憶良の歌「遠つ人 松浦佐用姫つまごひに 領巾振りしより負へる山の名」などが早く、その恋人は^{まつらさよひめ}大伴佐提比古とされています。松浦佐用姫の伝説は『曾我物語』や『太平記』にも引用されていますし、謡曲の番外曲『松浦』（世阿弥作か）にも劇化されていますが、江戸時代の作品にはあまり出てきません。元文5年（1740）9月大坂豊竹座初演浄瑠璃『武烈天皇 艤^{ふなよそおい}』（為永太郎兵衛作）に佐用姫が石になった伝説が用いられていますが、歌舞伎で演じられた記録はありません。つまりこの絵は、歌舞伎ではなく、直接的には曲亭馬琴作読本『松浦佐用媛石魂録^{まつらさよひめせきこんろく}』（前編文化5年<1808>刊、後編文政11年<1828>刊、天保頃重版）を基にして作られた物と思われます。読本の口絵には、平安風俗で描かれた佐用姫と、本文挿絵に肥前松浦郡の浪人の妾玉嶋が、北条時頼に召された夫との別れを悲しみ、松によじ登って舟を見送る様子が描かれています。この歌川豊広画の挿絵は、本図のように石を抱いて沖を眺める構図のものではないですし、名前も異なるので、読本から直接取材したものとは考えられません。この絵は「ほのほのと」の和歌をよく知られた松浦佐用姫に見立てる、という「見立て」の巧妙さを見せることに主な目的があり、松浦佐用姫を美貌でしとやかで2ヶ月前の7月に歌舞伎『^{じらいやごうけつものがたり}自雷也豪傑譚話』で妖婦^{こしじ}越路などの重要な役で8代目團十郎の相手役を勤め、大当たりを取った3代目岩井糸三郎、後の8代目岩井半四郎に見立てて描いたという作品と思われます。

このように『見立三十六歌撰』の見立ては、36歌仙の和歌の意味を踏まえた上でそれを巧妙に歌舞伎や小説の登場人物に見立てるところに主な目的があり、更にその登場人物をその役柄に適した歌舞伎役者に見立てるという、2段階の見立てになっています。実際の歌舞伎舞台を反映していないことが多いのですが、歌舞伎役者を見立てるにあたっては、役者の特徴や個性、演技力へ

の判断、歌舞伎界の裏の事情までも投影させて描かれており、並々ならぬ歌舞伎への知識と愛情を感じさせる、そして見立てを解く楽しさを十分に味わうことのできる、優れた幕末役者見立絵であると思われます。こうした幕末役者見立絵は、作品の発想構造から言えば「戯作」を浮世絵化したものであり、「見立絵本」を浮世絵化したものと捉えられると思います。

[付記]

図版掲載をご許可下さいました、町田市国際版画美術館に感謝申し上げます。